

59 信越本線移設事業 ～新幹線新駅周辺整備～

受賞機関 上越市

<評価>

信越本線脇野田駅を120m離れた北陸新幹線上越妙高駅側に移設し、駅の一体化と駅周辺の土地利用を図った事業。新幹線駅と在来線駅を同一フロアにすることで乗り継ぎの利便性が上がった点や、駅周辺の土地利用価値を向上させた点が評価された。

はじめに

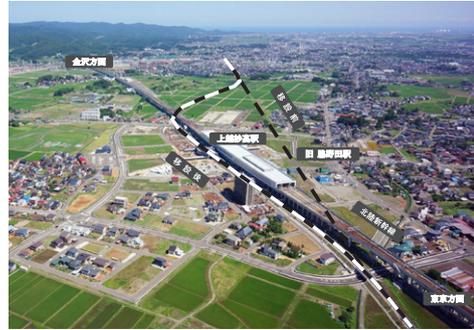
平成27年3月14日に開業した北陸新幹線「上越妙高駅」は、当市と主要都市を結ぶ広域交通結節点としての機能を担う、上越地域の新たな玄関口となることから、上越市では土地区画整理事業やアクセス道路などの都市基盤整備とあわせて、在来線を移設する「信越本線移設事業」を実施した。

事業の概要・成果

北陸新幹線「上越妙高駅」は、当市の主要駅であるJR直江津駅、高田駅への乗り入れではなく、高田駅から約3.7km南のJR脇野田駅付近を通るルートで計画され、かつ上越妙高駅の位置が脇野田駅と約120m離れていたため、鉄道の乗換えに不便が生じるとともに、鉄道敷に挟まれた土地の活用が制約されるなどの課題があった。

この課題を解決し、新幹線と在来線の乗換えの円滑化や利便性の向上を図るため、脇野田駅を含む、信越本線の約1.8kmの区間を移設し、新幹線駅と在来線駅を一体化する「信越本線移設事業」を行った。

移設工事は、平成24年3月にJR東日本と施行協定を締結し、同年8月から工事に着手、平成26年9月に移設が



信越本線移設事業（平成28年6月撮影）

完了し、同年10月19日に供用された。

これにより、乗り継ぎの利便性が向上し、また、駅前広場をはじめとする有効な土地利用が可能となった。

現在、信越本線は、JR東日本から第三セクターのえちごトキめき鉄道株式会社に経営が移管され、“妙高はねうまライン”として運行されている。

おわりに

北陸新幹線の開業から1年5ヵ月が経過し、上越妙高駅の乗降客数は開業前の想定を上回り、連日にぎわいをみせている。

当市では、今後も引き続き周辺の自然環境や景観と調和のとれた質の高いまちづくりを推進していく。

60 『現場の教科書』の発刊

受賞機関 栃木県 県土整備部 技術管理課

<評価>

ベテラン職員の大量退職に伴い、若い技術者にベテラン職員等の経験をどのように継承していくかが喫緊の課題である。この事業は、過去に起きた失敗事例やトラブル対応事例などを事例集としてまとめ、ネガティブな情報を逆手に取って将来の有効な知見として活用する取組み。発注者、コンサルタント、施工業者から幅広く事例収集を行い、建設業界の技術力向上に貢献している点が評価された。

はじめに

公共事業を取り巻く現状は、ベテラン職員の大量退職に伴う技術伝承機会の減少により、現場における技術力の低下を招いており、若い技術者にベテラン職員等の経験をどのように継承していくかが課題となっている。このため、栃木県では、平成21年3月に「現場の教科書Ⅰ」を、平成26年3月に「現場の教科書Ⅱ」を作成した。

事業の概要・成果

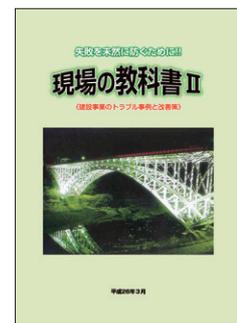
「現場の教科書」は、過去に起きた失敗事例やトラブル対応事例などのネガティブな情報を逆手に取って、将来の有効な知見として活用、情報の共有化を図ったものである。

「現場の教科書Ⅰ」は、土木分野を主体に、調査時、設計時、施工時毎に整理して計108事例を掲載した。「現場の教科書Ⅱ」は、土木分野の他に農務、林務、建築、機械、電気の分野の事例を加えるとともに、県のみならず、市町、コンサルタント、施工業者からも広く事例収集を行い、計249事例を掲載した。

「現場の教科書」は、県関係技術職員の他に、県内市町



現場の教科書Ⅰ



現場の教科書Ⅱ

の建設関係職員、栃木県建設業協会をはじめとする建設業関係団体に配布するとともに、栃木県技術管理課のホームページにも掲載している。施工業者やコンサルタントに対しても、情報の共有化が図れたことは、良いものづくりをしていくうえで画期的であると考えている。また、「現場の教科書」を活用した講習会も実施されており、技術力の向上に寄与していると考えている。

おわりに

「現場の教科書」は、失敗事例を公表することになるが、それが有用な知見として若い技術者に活用され、この情報が共有化されることで組織全体、ひいては建設業界の技術向上に役立ててほしいと考えている。